
Polar heart

柚生ゆと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Polar heart

【Nコード】

N4077R

【作者名】

柚生ゆと

【あらすじ】

―あらすじ―…つまらない男子校生活にあきあきしている南雲晴矢。そんな彼の近所に引っ越してきたのは……

イナイレの二次創作／南涼（基緑）の学園パロ／めちゃくちや、やおい文。です。

? : Soliloquy (前書き)

* イナイレ二次創作。

* 南涼（基緑要素有り。）の学園パロ。

* キャラ崩壊有り。

* やまなしおちなしいみなし。

* たまにR系あったり。

* やたら下手。

→ 一つでも嫌悪感を抱いた方は回れ右。

? : Soliloquy

——私立吉良学園。

金持ちと運動バカと学力バカが集まる、小説の中ならどこにでも在るような、男子校。——

そんな学園に、去年の春スポーツ推薦を利用し入学した俺、南雲晴矢は今日も今日とて、窓の外のうらかな空を眺めていた。

つまらないな。

この学園は、正直つまらない。
周りにいるやつらはみんな、自分の家の自慢ばかりだし。

部活だって俺は真剣に取り組んでるのに、男子校だからか変な目で見てくるやつが絶えないし。
別に、そうゆうのに偏見があるわけじゃないんだけど。
あれだけあからさまだと怖い。

…俺は『タチ』? 『攻め』ってやつ?に見られてるみたいだからまだましで、

実際俺の親友、茂人なんかは悲惨だった。
割と細身な茂人は『ネコ』認識されてしまつて、その上あいつは人が良いから、上手く丸め込まれて、よく押し倒されてたなあ…。

その度に俺が助けにいつて…いつのまにか俺と茂人ができてるんじゃないかっつー噂まで出て…。

でも、それを聞いたときには笑ったなあ…。

茂人は中学ん時から付き合ってる彼女が居るし、俺も付き合っなら美人な女が良いし、全然有り得ないってのにつて。

「…や？…る、は…や！…はるやつ…！」

「うわああああっ！！！！？」

あの日の事を考えていたら

その茂人の顔が目の前にあった。

「な、ななななんだよ…。」

「なんだよ…って、部活行かないの？」

「は？…部活…って、もうHR終わったのかよ！？」

時計を見れば、もう既に終業のチャイムがなってしばらく経つ。

「…晴矢…また寝てたの？」

「ね、寝てないっ！いろいろ考えてただけだっ…！」

「…まあ、良いんだけど、早く着替えなよ。」

…見れば、茂人はすでに部活着を着ていた…………

……部活のミーティングまであと5分。ちなみに、教室から部室まで走って4分。

「俺、先に行ってるからな。」

「まっ……し、茂人おおっ！……！」

……………俺、絶対絶命。

これまでも、このつまらない学園のせいだっ！……！

? : Soliloquy (後書き)

ありがとうございました。

誤字脱字ありましたらお知らせ下さい。

?: You (前書き)

二話目です。

? : you

「たっだいまー。」

…あの後、やっぱり部活に遅刻した俺は、理由を訊かれて口ごもつて、代わりに茂人が、『晴矢はいやらしい妄想してたんだよねー。』なんて言ってからもう大変。

…まあ、割愛するけどな。

で、普通に部活をやつて、今家に着いたところだ。
いつもなら、

「早くシャワー浴びなさいっ！もう、本当に臭いんだからあ。」
という母親の声が迎えてくれるのだが、それが今日はない。

「…おーふくろー?」

「やだ、晴矢今帰ってきたの?」

「……は?」

恐る恐る、呼んだら返事が真後ろから返ってきた。

「もうちよつと早く帰ってくれば良かったのに。」

そしていきなりケチをつけられた。

「はあ?つか、どこ行ってたんだよ。鍵開けっ放しだったぜ?」

いつもの部屋着みたいなのを着て、右手には何か包装紙に包まれた

箱をもち、母親はいつたいどこへ行っていたというのか。

「お向かいさんと話してたのよ。」

臭いわねえ、なんて鼻を摘みながら俺の横を摺り抜け、母親は言った。

…まるで、『当然』といわんばかりである。

「でも向かいって…」

たしか2ヶ月くらい前に引越さなかったっけ？

「引越してきたのよ。…それくらい考えなさい。まったく…」

「…へいへい。」

「…あとちよつと早く帰ってたら、晴矢も挨拶できたのに。あんたと同じくらいの子だったわよ。…まああんたと違ってマジメで礼儀正しい子だったけどね。」

「一言よけーだよ!」

すると、おふくろは今閉めた玄関のドアをもう一度開けた。

「ほらほら、あの子よ。」

俺のつつこみはスルーされたらしい。

そこまでして、見なきゃいけないのか。でもまあ、どんなやつかだけでも……………。

「…っ!?!」

ちらつと、本当にちらつと見ただけだ。

…その一瞬で、俺の心は完全に捕われてしまった…。

白いふわふわとした髪…

ちらりと覗いた釣り気味の蒼い目…

俺のストライクゾーンと真ん中の美人が、そこにいた。

「あ、あいつが……？」

「そうよ。仲良くしなさいね。」

そう言い残して母親がこの場を去った事に感謝する。

だって、多分今の俺は

とんでもなくだらし無い顔をしていたから。

なんか、感激と衝撃と色々混ざって本当に酷い顔だって自分でもわかるくらいだ。

ああ、もうちょっと早く帰ってくるべきだった。

しばらく突っ立っていると、不審に思ったのか、おふくろが声をかけた。

「なにやってんの。さっさとお風呂、入っちゃいなさいよ。」

「あ？…あ、ああ。」

? : you (後書き)

ありがとうございました。

?:transfer(前書き)

基線要素入ります。

いつかこの二人の物語も
書きたいなあ……………。

? : t r a n s f e r

「あ、晴矢。」

「…本当だ。おはよう!」

「…なんだ、ヒロトとリュウジか。はよー」

朝、学校には家から通っている俺が校門にたどり着いた、ちょうどその時、二人の学生に声をかけられた。

何事かと思い、振り返れば
見馴れた赤髪と緑髪。

幼なじみのヒロトとリュウジだ。

……朝からお熱い事で。

「つか、こんなところで何してんだ?」

「え?…ああ、今日は転校生が来るからね。見定め?」

「……お迎えじゃなくて?」

「…そうとも言っね。」

…赤髪の方、基山ヒロトは少し変態な所を除けば、完璧な好少年。
生徒会長もやっているから生徒からの信頼も、厚い。

…そして、頭も良ければ…スポーツもできるときた。

……………要するに、ム力つくやつだ。

「で、リュウジは？付き添い？」

「…え？あ、うん。…うん？」

「そうだよ。だって俺、リュウジがいないと駄目なんだもん。」

「…っヒロトっ！！！！！！」

で、こっちの緑髪が緑川リュウジ。

俺の弟分…なんだけど、ヒロトの恋人でもある。

リュウジは、中性的というより女性的な容姿で入学当初はいろいろ大変だった。

が、まあヒロトとは上手くいってるみたいだ。

「朝から熱いねー。」

ヒュウ、と口笛も吹いてみればリュウジの顔がみるみる真っ赤に。

…これで女だったら、まじタイプなんだけどなあ…。

「まあね。晴矢も早く青春しなよ。」

ヒロトは相変わらず、ニヤニヤ笑いながら、俺のハートを抉った。

「…っうるせえ!!」

「そーいや、転校生は2-Eだったよね、良かったね晴矢。」

「はあ!?!…俺は、男には興味ねーんだよ。」

そうだ、俺の好みは……………

「でも、写真を見る限り、けっこう綺麗で女っぽかったな。」

リュウジが顎に手をあてて言った。

「…多分、お前に言われたくは無いだろうよ。」

「うんうん、リュウジよりは劣るけど、美人さんだったよね。」

「…うるさい、バカップル。」

「…じゃ、俺教室行くわ。」

「…付き合って、られん。」

熱々してる二人を置いて、俺は教室へ向かった。

……教室は、騒がしいどころではなかった。
……既に、お祭り状態。

「おーっ！晴矢、遅かったな。」

そんな中でも、のほほんとしてられるのは、一部のリア充とノーマルなやつ。
その中の一人、茂人が話しかけてきた。

「……ああ、ヒロト達に会ったからさ……。」

「ふうん……。あ、じゃあ転校生の話も知ってたんだ。」

「ああ、美人転校生だろ？」

「そーそー。もうクラス中がお祭り騒ぎだよ。第二のリュウジ君だつてさ。」

「……リュウジ？」

思わぬところで聞いた、幼なじみの名。
何で、リュウジなのか
それは考えなくても解ってしまう。

「………転校生、苦労するな。」

…リュウジは酷く、苦労した。
目を離せば直ぐに襲われ、体操着は盗まれ、寮室には忍び込まれと大変だった。

今は、生徒会長であるヒロトが恋人、ということで、そういった事は起きなくなったが。

「うん。だろうな。」

自分も、少しだが経験した悍ましさに、遠い目をして茂人が相槌を打つ。

「茂人、なんか遠い目をしてんぞ。」

「そりゃあね……………」

茂人が相変わらずの遠い目で、口を開くと同時に、教室の扉が開いた。

「席につきなさい。」

担任の声と同時に、パラパラと席に戻る生徒たち。俺も自分の席に着いて、窓の外の景色を眺めた。
担任の話なんか、聞いてられるか。

「今日は、あなたたちも知ってると思うけど、転校生が来るわ。」

へーへー、知ってるよ。
美人さんなんだろうー。

担任は、長い黒髪を片手で梳き
俺を真っ直ぐ見つめた。

「南雲君、転校生の世話、任せたわ。」

………ん…？
なんだって？

「はっ…はああああ！！？…おっ俺があ！！？」

「そうよ、あなたが転校生の面倒をみてちょうだい。転校生は前は
普通の共学校だったらしいから、その辺も含めてフォローして下さ
い。」

………反論は許しません。
言外に、そう匂わせ担任はドアを開けた。

まあ、仕方ないか。

前が共学校だって事は、男子校の風習は知らないだろうから。
周囲にノーマルと知れ渡っている俺が選ばれただけだろ…。
茂人じゃ、頼りないしな。

「さあ、入って。」

担任の声にあわせて、人影が動いた。

∴transfer(後書き)

誤字・脱字等ありましたら
連絡下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4077r/>

Polar heart

2011年5月16日23時11分発行